

## 川端康成「伊豆の踊子」の映画化作品をめぐる私感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20959">http://hdl.handle.net/10291/20959</a>

# 川端康成「伊豆の踊子」の映画化作品をめぐる私感

宮 越 勉

川端康成の「伊豆の踊子」(『文藝時代』大15・1、二)は、六回も映画化され、五回ほどテレビドラマ化もされている。今や「伊豆の踊子」は多くの人たちに知られている川端文学の代表作の筆頭に挙げられる作品といえよう。最初に「伊豆の踊子」が映画化された際に原作者の川端には「文学と映画は別もの」であるという認識がすでにあり、映画の原作といえば「新聞雑誌連載の大衆小説」が主であったのが「伊豆の踊子」のような「短篇藝術小説」がその「素材」になることをよしとしていたのであった。また、五回もの映画化がされた時点での晩年の川端は「伊豆の踊子」のように「愛される作品」は「作家の生涯に望んでも得られるとはかぎらない」と述懐していたのである。

近年は、活字離れ、読書離れが言われて久しく、映像化、画像化されたものしか受入れられなくなっている傾向が強い。が、このような文学、ひいては文学研究の衰退状況にあって、六回もの「伊豆の踊子」の映画化作品を私なりに吟味、検討することで、逆に原作「伊豆の踊子」の味わい、ひいては文学の魅力について再考することができるとは思えないか、と思いいこの小文を書くことにした。

第一回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、五所平之助監督、伏見晃脚本、田中絹代主演の無声映画「恋の花咲く伊豆の踊子」(昭八公開、松竹キネマ、ビデオあり)であった。

伊豆の湯川楼という温泉宿から逃げ出した内芸者を巡

查が捜し、併せて鉾山技師久保田が久しぶりにこの地を訪れることから始まる。オーブニングからすでに原作離れしている。次に「物乞ひ旅藝人村に入るべからず」という立て札をめぐる悶着が展開される。この立て札を倒したのは別の者だが、村人たちから通りかかった旅芸人一行（踊子薫・演||田中絹代、その兄栄吉・演||小林十九二、その妻千代子・演||若水絹子、その母たつ・演||高松栄子、雇いの百合子・演||兵藤静江）の仕業とされそうになった。が、同じく通りかかった学生水原（演||大日方傳）の仲裁助力、すでに立ち去っていた虚無僧男が倒したのを目撃していた少年の、修身で教わった本当の事を言うという証言により旅芸人一行は事なきを得たのだった。これも原作にはないものであるが、立て札は元に戻されたのであり、確かに旅芸人が差別の対象であったことを示している。こうして水原は旅芸人一行にさして差別意識を持つこともなく下田まで旅と一緒にすることになり、まずは栄吉と親しくなる。が、一方で、先に登場していた鉾山技師久保田（演||河村黎吉）は、湯川楼の主人善兵衛（演||新井淳）とその息子の隆一（演||竹内良一）に金鉾を持たせてやったご褒美として金をせびってもいたのだった。その久保田は栄吉とは旧知の仲

で、栄吉の父が金鉾を持っていたのを栄吉が道楽をして金を使い果たし今や旅芸人に落ちぶれていることも分かってくる。さらには、善兵衛が善人で、栄吉と薫の父とも親しく、薫のために預金もし、いざれ薫を倅の隆一の嫁にする意向もあり、雇いの百合子は実は薫のいわば監視役だったことも判明してくる。だらしなのは栄吉で、湯川楼に借金があり、妹の薫をその内芸者にしようとして、薫を嘆かせ泣かせてもいたのである。湯川楼の主人が善人だと知り得ながら旅と一緒にする水原（学生服に学生帽で登場して来たが旅の途中からは鳥打帽を被っていた）と薫の間には恋が芽生え、花咲いていて、かなり親しくなっていた。が、下田に着くと水原は急に学校があるので東京に帰ると言い出す。港のシーンでは、栄吉に鳥打ち帽をあげ、薫には湯川楼の主人は悪くない、その息子の嫁にと言っている、兄栄吉を真面目な道へとも言うのであった。この旅での思い出にと水原は薫から櫛を貰い、万年筆を薫にあげるのだった。ラストシーンは、船出した水原を薫は追うように走り、手拭を手にして振り、万年筆を自分の口に近づけ涙してエンディングとなるのである。

この映画は成功したという。その要因を私なりに考え

てみれば、踊子役の田中絹代の初々しさのなかに漂う色気のある演技がよかったためだと思う。原作の薫とは似ても似つかない。現に、水原役の二枚目スター大日方傳が薫役の田中絹代の肩を抱いたり、その溪流の水に浸かった足を拭いてやったり、別れのシーンでは田中絹代から抱きつかれてもいたのである。次に、栄吉役の小林十九二（眼鏡をかけている）のいわばダメ男ぶりが際立ったこともよかったのではなかるうか。原作では何故栄吉が身を持ち崩し旅芸人一座に加わっているのかよく掴めない。その兄が甲府で跡目を継ぎ自分は余計者で好きでこの世界に入ったくらいにしか捉えられない。それを父の財産を道楽に使い果たした男とした。その妹まで旅芸人と芸者はさして変わらないとして湯川楼の内芸者にさせようとしたのである。ひどい男である。が、小林十九二のキャラクターから憎めないところがある。湯川楼の主人善兵衛の存在により、栄吉も薫も救われたといえる。

この映画のささやかな特徴をいえば、久保田、栄吉ら、そして母たつ（原作にその名の記載はない）までがよく煙草を吸っているシーンが映し出されていたことである。逆に、原作の「私」はむろん喫煙者であるにも関わらず、エリート的大学生（高等学校の学生設定ではないようだ）

の水原が煙草を吸うシーンはない。真面目いっぽうである。湯川楼の若旦那は大学（東京帝国大学だろう）を卒業したことになる。水原はその後輩に当たると。薫はこの先輩といずれ結婚するだろう。水原はこの短い旅で芽生え花咲いた恋に一時的に身を任せたと過ぎないものとなる。また、立て札を巡る悶着を描いたのはいいが、差別への強いプロテストは私にはあまり感じられなかった。

伏見晃の脚本で原作「伊豆の踊子」の内容は大きく改変されたといえるが、映画の途中で唄が五ヶ所挿入されている。これが伊豆の旅の雰囲気をよく醸し出しているようにも思われる。監督の五所平之助の映画を私は殆ど見ていないが、その作風は一貫して抒情的で、その優れた作品はユーモアとヒューマニティに富んでいるとされている。まさしくこの映画「伊豆の踊子」はその代表作の一つとしていいものだろう。

第二回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、野村芳太郎監督、伏見晃脚本、美空ひばり主演の映画「伊豆の踊子」（昭二九公開、白黒、松竹、DVDあり）である。

脚本が前作と同様に伏見晃であるためか、栄吉と薫の故郷は湯ヶ野となっている。それ故であろうか、映画の

後半部では、薫（演Ⅱ美空ひばり）は、ゆくゆくは温泉宿湯ノ沢館（熱い湯が出るようになって繁盛している）の若旦那（演Ⅱ三島耕）の嫁になることになっていて、兄栄吉（演Ⅱ片山明彦）は、その父が借金のため湯ノ沢館を今の湯ノ沢館の主人（演Ⅱ松本克平）に譲り渡すことになり、勝手に家を飛び出したことになっている。栄吉と薫の父はまだ生きていますが、今の湯ノ沢館の風呂番で飼いかた状態で老け込んでいる。栄吉は旅芸人一座に入っているが、そういう父に仕送りもしている真面目な面も持つ人物設定となっている。だから薫はそういう兄思いで嫁に行くまでは栄吉と一緒にいたいという。故に前作同様、基本的には、水原（演Ⅱ石濱朗）と薫の恋は旅の期間だけの一時的な恋というに過ぎないだろう。

この映画のオープニングは、「昭和はじめ」、「沼津より修善寺に通る路」と字幕で示され、富士山を眺められる画面の奥から大勢の子供たちが「箱根八里」の歌（鳥居枕作詞、瀧廉太郎作曲）を唄いながら画面前方に向けて来るというものになっている。次に、馬車の中のシーンとなり、水原が隣の女から煙草を勧められるが吸えないと断っている。のちに水原は、有名な小説家の逗留する修善寺の宿に行くが、ここでは酒も飲めないことになっ

ている。そして、孤児で独特の不健康さがあるとも言われているのであった。原作にある「孤児根性」の歪み、その「息苦しい憂鬱」に耐えられず伊豆への旅立ちだったとも解釈できる。なお、この映画では、地元の人々が多く出て来るが、伊豆地方のなまりのある言葉つかいをしており、自動車か馬車かという争いも見られ、戦後のまだ成長期以前の時代性も伝わってくるものとなっている。原作でいう「私」の修善寺での一泊の有り様を映画製作者側がその空白部を埋めるように独自に創作したのともいえよう。修善寺での旅芸人一座は、或る宿の二階からお捻りを投げられ路上で踊りを踊ったり歌を唄ったりし、或る宿に泊まる矢鱈に英語を使いたがる客（演Ⅱ芦田伸介）の前で栄吉が剣舞をしたりするシーンもある。こうして修善寺でほのかに踊子を見そめていた水原は、踊子たちが向かうであろうと下田までの一人旅となり、雨の中を歩き、茶店に辿り着くことになる。茶店のばあさんは別の部屋に案内し水原は暖を取るが、そこには中風のじいさんもいて、ばあさんの「あんな者」（旅芸人一行）どこにだって泊まるですよ、あてなどない、という軽蔑の言葉も聞かされるのである。その後も原作の展開に即すようにしているが、原作と異なるのは水原が茶

店に十円札を忘れ、茶店の少年がそれを返すように言われて書生さんを捜し求める旅に出るという味付けをしている。今現在と違い、子供が大勢いた時代性も感じられるものとなっている。

薫役の美空ひばりが歌手ということもあり、ひばりの歌が多く挿入されるのもこの映画の特色となっている。また、先にも述べたように伊豆地方の土地柄がよく出ていて、大勢の宴席ではノーエ節が唄われていて、のちの映画「伊豆の踊子」への影響面からすれば、これは効果的だったといえよう。原作で「私」が、踊子がまだ子供であると知って安堵する場面(二三)はさすがに手拭のない真っ裸の踊子とは画面には出せず、着物を着ている踊子が手を振った際に手拭を川に飛ばし笑いを誘うという演出にしている。原作に出て来る紙屋と鳥屋はこの映画には出て来ない。鳥屋の代わりに小間物屋が出て来て、薫の尻をさわわり、「おふくろ」(原作の表記、これは原作で当初「四十女」とされていたのが「私」が踊子たちと親しくなると地の文でも「おふくろ」と表記されていること(「四」の半ば以降)に気づく)に触ってはいけな、生娘なんだからね(原作は「四」の後半)、と言われるシーンになっている。ラストの別れのシーンは、汽

船での水原の出発で、銅鑼の音、螢の光の楽曲も流れ、大勢の人たちに見送られるなか、沈んでいた薫が手を振るだけのものになっている。

この映画の出来栄えに関する私見を述べれば、原作の筋に合わせた部分と栄吉と湯ノ沢館の若旦那の確執めいた部分とがうまく噛み合っていない印象を受けた。つまり石濱朗が引き立たず、片山明彦と三島耕とが印象度が強くなっている、折角の美空ひばりと石濱朗の恋が際立っていない憾みがあるように感じられたのである。美空ひばり人気ということでのこの映画はヒットしたに過ぎないのではなからうか。

第三回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、川頭義郎監督、田中澄江脚本、鰐淵晴子主演の映画「伊豆の踊子」(昭三五公開、松竹、カラー、ビデオあり)であった。

この映画は原作からの改変箇所が頗る多い。大きな点だけ挙げれば次の四点になる。第一に、薫(演||鰐淵晴子)と千代子(演||城山順子)は実の姉妹で、「おふくろ」(演||桜むつ子)の胤の違(たね)う父無(て)し子とされている。第二に、茶店のばあさんは、旅芸人一座に優しく、原作で「水死人のやうに全身蒼ぶくれの爺さん」(到底生物(いきもの)と思へない山の怪奇)ともされている)は出て来ず、孫

を亡くしたという設定になっている。第三に、昭和初年の設定はやむを得ないとしても、季節はひな祭りのある春になっていて、下田の港で水原（演||津川雅彦）が見送りに来た栄吉（演||田浦正巳）と薫との別れのシーンは朝でなく夜になっている。第四に、雇いの百合子（演||瞳麗子）は原作ではおとなしくはにかみ盛りとされているのとは大いに異なり明朗活発な性格で、水原と薫の仲がいいのに嫉妬し、芸者に憧れ、旅芸人と同行もしていた小間物屋（演||中村是好）に近づき芸者になろうとして姿を消すが、ラストで芸者稼業の何たるかを知り旅芸人一座に戻ることになっている。

冒頭は修善寺温泉で、次が湯ヶ島温泉、そして湯ヶ野温泉と前作（ひばり版）を踏襲している。旅芸人を軽蔑するのは、湯ヶ島温泉の宿の番頭だったり女中だったりしている。が、旅の道中では水原（両親を亡くしているというが津川雅彦のキャラクターからは暗さは全く感じられない）と薫は何の屈託もなく明るいムードで仲よくなっている。「おふくろ」はそんな二人に優しく、薫にはまた会えるさと言ひ、下田の波止場に見送りに行けと言っている。この「おふくろ」は苦勞して来た旅芸人だが、身持ちの堅いのには信用がある、千代子の妊娠を知り

栄吉に大島で正式の婚礼を挙げるよう言い、千代子が流産すると金策に奔走するが決して自ら身を売るようなことはしなかった。旅芸人一座のリーダーで健全さが際立っていた。宴席では多くの歌が唄われていたが、金策での夜の一人の流しで唄うノーエ節は丘巻だと感じた。さらにそのラストで唄われる当時の流行歌「君恋し」（時雨音羽作詞、佐々紅華作曲、二村定一歌唱のものは昭和四年に大ヒット、なおフランク永井のリバイバル・ヒットはこの映画の翌年昭和三六年である）にも明るさが横溢している。総じて、この「おふくろ」は「お師匠さん」とも呼ばれ、桜むつ子が、主役のはずの鰐淵晴子を食べ、真の主役となっているという印象を与えている。興行成績はおそらく芳しいものではなかったと思われる。が、極めて稀にある健全な旅芸人一座を描いて見せたとするならば、眨めるばかりでなく、映画の観客として単純に楽しめばよいという気持ちにさせる。

第四回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、西河克己監督、三木克己、西河克己脚本、吉永小百合主演の映画「伊豆の踊子」（昭三八公開、日活、カラー、DVDあり）であった。

作者の川端康成がロケ地に足を運び、吉永小百合の人

柄を好み、「なつかしい親しみ」を感じたという文章も残している。原作の薫は、「卵形の凛々しい顔」で「黒眼がちの大きい眼」を持ち、「花のやうに笑ふ」少女なのである。その点で吉永小百合は適役だったとしていいだろう。

この映画は、原作の「伊豆の踊子」に同じ川端の作品である「温泉宿」(『改造』昭四・一〇、『文藝春秋』昭五・一、『新潮』昭五・一)を巧みに流し込んでいることに気づかねばならない。

この「温泉宿」は、温泉宿に住む旅館の女中たちや酌婦たちを描いたものだった。主な登場人物を紹介しよう。お滝は百姓の出で力が強く親分肌の一八歳、町の肉屋の女中をしていたがそこが暇な夏は村に帰って宿屋の手伝いをしていて、お雪という一六歳の小娘に慕われていた。お雪は貧しい家の出だが身持ちの堅い方の娘で、生来頭がよく尋常三年の時は赤ん坊を背負って小学校に通いながらも主席で進級し校長から賞品を貰ったが周りの子らの嫉妬を買ってか尋常四年で中退、継母にいじめられ傷をあちこちに残していた。芸者屋に奉公していたが芸者になるのがいやで逃げ出し宿の女中になっていた。悪い男にひっかかり風の便りでは売春婦にさせられたという。

お清は十六七からこの村に入って来た、瘦せて病弱な酌婦だが、村の子供たちに好かれ自分の葬式には子供たちが行列を作っている幻を見ていた。が、その葬式は夜明けの寂しい哀れな弔いとなったのであった。お咲は曖昧宿にいる酌婦で、お金目的というより男好きの生来の娼婦というべきだが、夜明け前の男との密会の最中、同じ酌婦のお清の寂しい葬式を目にすると、ラッパ飲みをしていた酒瓶を力一杯投げつけ竹の幹に当たってガラスのかけらが散ったのであった。

さて、この映画は、大学教授となっている川崎(演||宇野重吉)が教え子の学生(演||浜田光夫)から少女歌劇にいた少女(演||吉永小百合)と結婚するに際し仲人を頼まれるという現在時(モノクロ)に始まり、踊子という連想から四〇年も前の長い回想部(カラー)に入って、再び短い現在時(モノクロ)に戻って終わるという斬新な手法を採っている。二〇歳の川崎(演||高橋英樹)は、学生服に学生帽をかぶり、朴歯の下駄、カバンを持ち歩いているが、道端で休んでいる旅芸人の一行を見かけた。やがて川崎が煙草を吸いながら休んでいる所の傍には「物乞ひ旅藝人入るべからず」の立て札が立っていた。そこに旅芸人一行が通るが踊子薫(演||吉永小百合)



は、集まって来た子供たちに太鼓敲け、太鼓敲けと囃子立てられるが、おふくろ(演||浪速千枝子)に叩かないようにという目配せを受け太鼓敲きはしなかった。そのあとはほほ原作の筋に従い、茶店シーン、栄吉(演||大坂志郎)に案内されたちゃんとした宿での紙屋(演||井上昭文)と囲碁を打ちながらのシーンとなる。茶店のばあさんに煽られて寝苦しい夜には薫と人夫頭(演||郷鏖治)が床の中で一緒に寝ているところに川崎が入って行き、水の中に突き飛ばされるといふ夢を見た。が、翌朝の風呂場のシーンで薫がまだ子供であることを知り安堵の笑いを漏らすのだった。薫は、子供たちと鬼ごっこをするうち、お清(演||十朱幸代)に出会い、やがてそこにお咲(演||南田洋子)がやって来て、酌婦の悲惨な生活の一端を見てショックを受けるのであった。ここは「温泉宿」からうまくアレンジして挿入した部分と思う。また原作に出て来る鳥屋(演||桂小金治)が水戸黄門の講談本を薫に読み聞かせるシーンもこの映画が初めてだった。宴席ではノエ節が唄われ、栄吉の国定忠治の芝居もされていた。宿の入浴(混浴)シーンでは、女中らと酌婦らの諍いがあり、お清の死が知らされた。早朝のお清の棺の上には土葬に使う鍬が置かれていただけだった。

逆方向に歩いて行く川崎にはお清の死など無縁であることを暗示させていよう。子供らが付いて来るといふことのない寂しいお清の棺運びを目撃したお咲はお金のためでないと売春は真っ平だと居直るのだった。小高い山で川崎と薫だけになる場面では、薫は甲府で弟を負ぶって小学校に通ったこと、賞状も貰ったことがあること、弟はすぐ死んだことを話す。ここは「温泉宿」のお雪のエピソードをアレンジして採ったところで秀逸である。下田の木賃宿でのシーンでは、おふくろが旅芸人の娘が学生に惚れてもしょうがない、世の中にはどうしようもないことがあると階級差を栄吉に話しているのを薫が階段の途中で立ち聞きし何か悟るシーンが圧巻である。所詮踊子と学生は結ばれることはない。その夜は宴席で何か吹っ切れたように踊る薫と、薫が作った折鶴を握り潰し勉強に励む川崎の対照が見事に描出されている。翌朝の下田の港の場面も原作通りの舳舟から汽船へと移ることになっていて時代性を感じさせるものとなっている。が、別れのシーンは岸壁でただ手拭を振るだけの薫はまだしも、川崎役の高橋英樹が「おーい」と二度叫ぶのは第三回目の津川雅彦と同じで俗っぽく、別の演出の工夫がなくてよかったのではないかと思う。

第五回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、恩地日出夫監督、恩地日出夫、井手俊郎脚本、武満徹音楽、内藤洋子主演の映画「伊豆の踊子」（昭四二公開、東宝、カラー、ビデオあり）であった。

基本的に前作日活版「伊豆の踊子」を踏襲したものと見える。オープニングは川崎（演||黒沢年男）が「道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて来た。（以下略）」という原作の冒頭部をナレーションしながら、学生帽、紺がすりの着物（原作はこれである）、朴歯の高下駄などの出で立ちで歩いているシーンから始まる。旅芸人一行ではおふくろ（演||乙羽信子）が小犬を抱っこしている（原作はこれである）が目立つ。湯ヶ野温泉に入る道で子供たちに囃子立てられ薫（演||内藤洋子）が太鼓を敲いているのが前作日活版と異なる。薫が子供好きとしたためだったろう。以後、紙屋（演||小沢昭一）、鳥屋（演||西村晃）で前作日活版を凌駕しようという意欲が感じられた。「温泉宿」からの嵌入は、お清（演||二本てるみ）に深い同情を注ぐお咲（演||団令子）の好演が際立っていた。竹林シーンではお清の寂しい葬式を見てお咲はラッパ飲

みをしていた酒瓶を投げつけ竹に当たり瓶が音を立てて割れるところまで描いていたのである。同じように姉さん株が妹分を心配するのはお滝（演||北川町子）が温泉宿を飛び出したお雪（演||酒井和歌子）を追い捜していることで、下層の女性たちの運命が暗示され、この映画に厚みを持たせているように思われた。下田の港での栄吉（演||江原達治）と川崎の別れのシーンは、柿と鳥打帽の交換はまだしも、解が出るようですと栄吉が言うだけであり、船上のシーンで川崎と薫がさよならと言っているのは原作（薫は一言も言わず何度もただうなづいて見せるだけである）にそぐわない。ラストシーンは、その夜のことで舟の甲板で涙をたくさん流す川崎から宴席で一心に太鼓を敲く薫の顔のアップで終わるのは平凡だが、武満徹の哀歓のある音楽が効いていて悪くはなかった。内藤洋子の演技も好く、脇役たちもそれぞれにいい味を出していたと思う。が、総じて日活版のリメイク版の域を出ず、新味に欠けていたと言わざるを得ないだろう。

第六回目の「伊豆の踊子」の映画化作品は、西河克己監督、若杉光夫脚本、山口百恵主演の映画「伊豆の踊子」（昭四九公開、東宝・ホリプロ、カラー、DVDあり）

で、川端康成の自死（昭四七）のあとのものであった。

山口百恵人気で興行成績はよかったが、映画作品の出来栄えとなれば凡作に終わった感を否めないだろう。西河克己二度目のメガホンだが、前作からの細部の改変、川島（演Ⅱ三浦友和）に原作通りに紺がすりを着させたり、おきみ（お清に当たる、演Ⅱ石川さゆり）を薫（演Ⅱ山口百恵）の大島での幼馴染にしたり、おふくろ（演Ⅱ一の宮あつ子）に犬を抱かせたり、紙屋（演Ⅱ三遊亭小円遊）を助平で剽軽な人物にしたり、美男の栄吉（演Ⅱ中山仁）と美女の千代子（演Ⅱ佐藤友美）に宴席で安木節の滑稽な踊りをさせたり、山口百恵に美空ひばりが歌った「いでゆの里」を唄わせ挿入したり、茶店の婆さんの「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。（以下略）」のセリフをラスト近くで再び挿入したり、ラストのノーエ節を唄っている宴席で薫に抱きつく刺青男でエンディングとすることなどがあって、総じて薫がいずれ酌婦か芸者に堕ちて行く運命を暗示させている。

川端康成は「伊豆の踊子」を事実そのままで虚構はない、あるとすれば省略だけであるとしていた。この作品の要諦は、それぞれ肉親らしい愛情でつながり合っている。

る、おふくろと千代子、栄吉と薫、そして雇いのはにかみ盛りの百合子の「野の匂ひを失はないのんきなものである」旅芸人一座に、孤児根性で歪み反省を重ねるも憂鬱に堪え切れないでいた「私」が「好奇心もなく、軽蔑も含まない」、「尋常な好意」が「彼等の胸にも沁み込んで行くらし」いこと（四）からひと時の旅の道連れを楽ししみ、その「頭が澄んだ水になつてしま」うまで浄化され、永遠とも思える別れを迎える哀歓が醸し出されているところにある。

六度に及ぶその映画化がされた時代は今の日本の世相からすればすでに遠い昔のようにも感じられるが、ここに文学のふるさとがあると思っている私なのである。

#### 参考文献

- ・川端康成「伊豆の踊子」の映画化に際し（『今日の文学』昭八・四）
- ・川端康成「伊豆の踊子」（『別冊小説新潮』昭三八・七、『小説新潮』昭三八・八）
- ・川端康成「伊豆の踊子」の作者（『風景』昭四二・五、四三・一一）